私の人生のターニングポイント

札幌市医師会
とみた整形外科
富田文久（とみた ふみひさ）

謹賀新年。2026年の干支は丙午（ひのえうま）、私も丙午の1966年生まれの年男。今年６月に60歳となり、還暦を迎える。丙と午はどちらも火の要素を持ち、重なった丙午は真夏の太陽のようにパワフルである。2026年から丙午：人生第二章が幕を開けるが、今回は人生第一章を振り返り、人生のターニングポイントについて述べたい。

第１のターニングポイントは３歳の時に池に落ちて死にかけたことである。母親がトイレに行っている間にいなくなり、見つけた時には池にうつ伏せで浮いていて、引き上げた時には顔色も悪く意識がなかったが、間もなく意識が戻ったらしい。この話は大人になってから子供のころの思い出話の一つとして母親から聞かされた。あまりにも衝撃的な内容を楽しそうに話すものだから、その当時は笑い話として認識していた。でも今振り返るとあと数十秒、いや数秒発見が遅れていたら、引き上げたときに意識が戻らなかったらと考えると背筋がぞっとする。

第２のターニングポイントは未知の地であった北海道に憧れ、周囲の反対を押し切り北海道大学を受験し入学できたことである。合格するという根拠のない自信と北海道への思いが私の原動力となり、丙午の恩恵と苦手の物理の試験問題が高校の期末テストの問題とほぼ同じという幸運を引き寄せ合格することができた。しがらみのない自由な環境の中で、ありのままの自分を出しどんなことにも全力で臨んできた。それが相手への敬意であり礼儀だからである。幸運にも多くの気の置けない友人や尊敬する上司と巡り合い、医師としてどのように患者に接するか、後輩の医師や医療スタッフへどのように関わっていくかを学んだ。この人との出会いや繋がりを大切にし、細くてもいいから長く継続していくことが後に宝となることを知った。

私は今、医者という患者の人生に関わる仕事に就き、私の言葉や態度の一つ一つで患者を喜ばせたり悲しませたりすることを理解している。患者本人も気付かないようなわずかな変化を敏感に感じ取り、今自分ができることを精一杯行って、患者を来院時より元気にして、ここに来て良かったと言ってもらうのが私の目標である。

北海道に来て41年、医者になって35年。60歳定年で引退と思っていたがまだ先の様だ。今年の夏は丙午の太陽の下で、友人たちと酒を酌み交わし還暦を祝いたい。

新春随想～熊の事～

紋別医師会
紋別市立上渚滑診療所
柴田俊一（しばた としかず）

年男という事で執筆依頼を受けましたが、さて、何を書こうかと思っていたところ、最近毎日の如く熊のついての報道がなされている事から、それについて思い出した本の事を交えて、少しばかり書きたいと思います。

私が現在勤務している紋別市立上渚滑診療所は、自然豊かな場所にあり、10年ほど前の平成27年には近所で約400kgの大熊が駆除されています。

これは未曽有の被害を出した三毛別羆事件の羆が340kgと言われている事から、どれほどの大きさか分かるかと思います。

その三毛別羆事件について書かれた本で有名なのが、「慟哭の谷　北海道三毛別・史上最悪のヒグマ襲撃事件」（木村盛武 著、文春文庫、2015年）と「羆嵐」（吉村昭 著、新潮文庫、1982年）が挙げられます。

（前者は、先に1965年に営林局誌に、後に1994年に共同文化社より「慟哭の谷　The Devil′s Valley」として発表されており、同著は加筆されたものです。）

「慟哭の谷」は二部構成になっており、第一部は三毛別羆事件、第二部は著者の体験を交え北海道でのヒグマ事件や考察などを取り上げています。

本著は書店や図書館などで容易に読めると思いますので、内容については実際に読んでいただく方が早いかと思われますが、同著で印象深かった事として、ヒグマの生態を少々挙げたいと思います。

ここで繰り返し述べられている事に、ヒグマの餌への執着です。一度獲物として認識したが最後、それはもう完全に自分のモノであり、屋外やテント外に置いておいた食物を回収しても、人を襲った遺体さえも、取り上げたが最後それを「取り戻そう」と執拗に襲ってくるそうです。

また、ヒグマは火を恐れないそうです。むしろ、好奇心に火中に入る熊もいるそうです。

勿論、積極的に人を襲い、執拗な攻撃を繰り返すのは一部の熊に限られる事から、従来通り熊鈴などで居場所を知らせる事は決して無効ではないそうなのですが、出合わないように注意する、もし出合ってしまったら背を向けずに牽制しながら距離を取る事が肝要らしいです。